

姉

樋口祥巳

公職を定年退職して、何もせずに、毎日が日曜日だということ、ポーツとしていると、たいがい体調をくずして、年金を二〜三年いただいただけで、あの世いきのケースが多いという。

人間、気を抜かず、生活のリズムを大切に、規則正しい生活をしていればこそ、命が長らえるというものであろう。そういうわけで、僕も妻にすすめられて、公職を退いた後、すぐに四月初旬から、近くの公民館に勤めることにした。毎日、弁当を持って出かけるのは、退職前と同じであるが、田舎の公民館なので、それ程、忙しいということはない。仕事は公民館の単発事業の準備や、貸し館など、適当にあつて、ひまということはない。それでも来館者の少ない日などもあつて、二三時間は何もすることがなく、自分の時間として、雑文を綴ることができ。この文は、そういう時に、自分のまわり

に、かつて居た姉について、書き継いできたものである。

僕には二人の姉がいるが、五歳頃まで、上の姉については、何も知らなかった。上の姉は、僕が生まれる二年前の、昭和十年に結婚していて、東京へ行っていたからである。

この姉は大正二年生れで、僕より二十四歳も年長で姉というより、母親の世代の人である。事実、長男の正幸さんは僕より一歳年長で、叔父の僕が、年下という珍現象が出現していたのである。

僕は四人兄弟の末っ子であるが、年の離れた末っ子となっていた。と、いうのは、僕の母が後妻としてこの家に入ったので、先妻の子は三人とも、皆大正生れで、年齢がはなれているのである。

昭和十七年、大正十年生れの兄が、出征するというので、僕は母の背中におぶさつて、村はずれまで見送ったことがあ

った。当時は出征する兵士の家の庭には、旭日旗や日章旗の小旗が高い竿から四方につるされて、出征を祝ったものである。すべて御国のためで、家族は男手のへることの淋しさを顔に出さないようにして、心中では泣きながら、バンザイで送り出したものである。

また、村人達も総出で、村はずれの神社前の広場まで見送るのが習わしになっていた。広場には、大きな庭石みたいな石があり、そこに立って、出征する兵士は見送ってくれた村人達にお礼の挨拶をしたものである。そして無事兵役を終えて帰郷した人には、村人達が資金を出して、除隊記念の杯をつくって縁者に配布したものである。

僕は母の背中におぶさつて、村人達に挨拶をする兄の声を聞きながら眠くなつて、うとうととしていた。

その時、見知らぬ女の人が近づいてきて、「眠っているのね」と言いながら、僕の顔をのぞき込み、当時としてはめずらしいキヤラメルを一箱、手渡ししてくれたのである。その人が一番上の姉で、これが最初の出合だった。弟が出征するので、

東京から、かけつけたとのことである。

この姉は東京へ嫁ぐ前、本人は昭和八年頃といっていたが、近くの医者^の看護婦をしていたとのことである。この医者の専門は内科であったが、田舎だったので、外科や皮膚科その他、なんでも診ていた。

ある日、農作業中に、鎌で手首を切った人が、血だらけでやってきたことがあった。看護婦の姉は、その血を見たところ失神してしまったので、医者が驚いて患者と看護婦の二人の手当をしたとのことであった。看護婦が血を見て失神するようでは、内科の場合はよいが、外科は、とうてい勤まらないということで、やめたという話を、母から聞いたことがあった。とにかく、心のやさしい人であることは、顔の表情からも分った。常に自分のことより、他人のことに気をくばる人であったようである。

この上の姉については、出征する兄を見送った後、東京へ帰っていったので、僕もいつしか、忘れてしまっていた。

下の姉とは同じ家に住んでいたし、年も十一しか違わなかったので、よくけん

かもした。しかし十一も年がちがうと、女とはいえ、力の差は歴然で、いつも投げとばされて、勝つことはなかったが、どこか弟おもしろいところがあって、映画や買物にもつれていってくれたりした。そのため、母より、この下の姉との思い出の方が多くいらいである。

この姉は大正十五年生れで、干支は虎であるが、おとなしくて、しかもやせていたので「藪蚊の足跡」などと、近所の人から言われたりしていた。

この姉が尋常高等科二年の時、僕を背中に背負って授業を受けたことがあった。今でいえば、中学二年の女の子が二つか三つの幼児をおんぶして、授業を受けるみたいなおものである。

僕が教室で「合^おうた、合^おうた」と答えて合ったことを大声で言ったそうで、このことを、よく話してくれたものである。僕はあまり覚えていないが、きっと姉の背中^で、はしゃいだのであろう。何か言いながら、教室の床をはったような記憶がある。とにかく、ほんやりとした記憶なので、その日の授業の時のことではないかもしれない。姉は授業が終ると、重

くなっていたのか、荷物をおろすようにして、教室の床に僕を座らせてくれた。

昭和十年代の小学校では、そんな姿が、あちこちで見られたものだと思う。

昔は子供がたくさんいた。「産めよ、増やせよ」の時代で、子供は人的財産であった。子供は、男の子なら大きくなって、戦う兵士になる。子供の多いことは、その家にとっても、社会にとっても誇りであった。従って、多い家は一ダースの子宝にめぐまれて、子宝家族といわれて祝福された。子供の多いことは名誉なことではあるが、育てる方は大変で「貧乏の子だくさん」というが、実にその通りで、子供の多い家の親は、生活に追われて子供などは、ほったらかしであった。従って上の子が母代りをしないと、やっていけなかったのである。それでも兄弟姉妹は仲良く、力を合せて、健全に育ったものである。

それが、どうしてなのか、両親の愛情を一身に受け、しかも経済的に何一つ不自由しない身で、非行を重ねる若者の記事を現今の新聞等で読むたび、考えさせられるのである。現代は、衣食足って礼

節を知らずの時代になっていながらも、物に価値が下がるにつれ、その物を作った人の心が忘れさられた結果の現象かもしれない。

戦後、物のない時代、食べる物がすべてで都会から田舎へ、人々がよく買い出しに来たことがあった。空のリユックを背負って来て帰りは、米やサツマイモを一杯つめて、帰って行くのである。サツマイモが一貫目十円で売れた驚異の時代である。

わが家でも、ほりたてのサツマイモを水洗いして、泥をおとし、ふごに入れて、軒下にならべ、買いに来る都会の人に、すぐに売れるように準備をしていた。

お金の価値は、日に日に下落し、紙幣ではあまり物が買えず、農家は売り惜しみをしたりして、物価をつり上げていた。

そんなある日、買い出しに来た若者に、父が以前の価格の一貫目十円で売ったら、その青年が、何を思ったか、画用紙を出して、父の肖像画をかい、お札の代りに置いていった。青年は美大生とのことで、父の親切心にうたれたのかもしれない。

当時は物不足で、生活必需品は配給制で、切符を持って並ばなければ、物が手に入らなかつたが、闇市では何でも買えた。しかし、ここではお金より、物々交換が優先し、中でも米が最も重宝がられていた。又、砂糖もなく、正月の餅は塩あんであった。甘くするため、砂糖の代用品として、サツカリンが使われた。これは甘いことは甘いが、舌がスーとして、いやな甘さで、後味の悪いものであった。この味は食べた者しか知らないと思う。もちろん、今となっては、サツカリンという物の名さえ、聞いたことのない人の方が多くなっていると思う。

昭和二十一年の夏休みのある日、二人は近くの鼓ヶ浦駅から電車に乗った。電車は満員で、押し合い、へし合いの状態だった。九歳だった僕は、大人の人の中あたりに顔を押しつけられる状態で、両手に米袋をもっていたから、つかまるものがないので、電車がゆれるたびに、周囲の人にもたれかかったりした。

こんな時代に、年頃の娘時代を迎えた姉が近くの町の人と見合いをして結婚することになった。

当時の結婚は、仲人となる人が、適当な相手を見つけてきて、見合いをさせて、それで双方に異存がなければ結婚が決まっていた。村々には有力者で、世話好きの人がいて、仲人として活躍していたのである。

まず、着物の材料であるが、これが大変で、紙幣では買えないので、米で、何とか買うことにした。米なら、物々交換で銘仙を出す商人が津にいるとの話を聞いて、両親は姉と僕に米を持たせて高級品の銘仙を買うことを計画した。そこで、白米を僕が二升、姉が五升持つて、津まで銘仙とよばれる高級絹織物を買うに行くことになった。当時はほとんどの布が人絹とよばれる人造絹であり、高級な銘仙などは祝い事にしか購入されない物だった。

娘を結婚させるには、それなりの準備があるので、両親は何かと忙しそうにし

が、多いのだから、電車がすこすいた。当時の電車は、すべて横座りの席で、立っている僕は、四十すぎのおじさんが

座っている前にいた。姉は、と見ると、同じ車両ながら、はるか向うの方で、つり革をつかんで立っていた。

突然、前のおじさんが、

「坊や、重そうやな。持ったろか」と言つて僕から米の袋をすばやく取つた。

「あの一、それは着物と交換する米やで、僕が持ちますけど・・・」と言つても、返してくれず、

「そうか、米か、これは白米やな。きょうびは金では売つてくれんのでう。それで、どこまで行くのや」

「津新地まで」と、僕が答えると、

「そうか、ちようどええわ、わしもそのへんまで一緒やさかい、持つたるのでう」と言いながら、そのおじさんは立ち上り、「知つた人がおるので、ちよつと挨拶してくるわ」と言つて、離れていった。

そのうち駅についたのか、電車が停つた。津新地までは、まだ二つほど駅がある筈だった。そんな事を考えながら、ふと周囲を見た時、びっくりした。あのおじさんがいないのである。つい、さつきまで、そばにいた筈なのに、知人に挨拶をしてくるといつて、席を立ったさきり、

いくら探してもいないのである。僕は泣きそうになり、人をかき分け、姉のそばに行つて、

「姉ちゃん、米をとられてしもた。知らんおじさんが、持つたるちゆうて、そばにいたのに、あつという間におらんようになつた。親切そうな人やつたのに、きつとさつきの駅で降りてしもたんや。どうしよう」と、泣き声を出すと、

「あはやな。そやではたにおれと、言うたやろ。米でしか、物は買えへんのやぞ。二分分だけ買えんようになつたやないか。まあ、取られたものは、しようないわ。子供に持たせた罰やと思つて、すこし悪い反物にしやええのやさかい、もう泣かんでもええ」と、姉は僕の背中を、米を保持つていない手で軽くたたいて、なぐさめてくれた。

僕は姉と二人で、津新地駅に降りた。今はもうこの駅はない。かつては津駅でのりかえる伊勢線といわれる電車が、海岸沿いに走っていたものである。今は線路がはずされ、車の通る道路になつて、わずかに川にかかる橋脚が、かつて電車が通っていた線路であることを示し

ている。

僕は姉と二人で駅から大門の方へ、焼け跡のバラックが建ち並ぶ中を歩いて行つた。津が焼夷弾攻撃で、焼かれるところを、遠く鈴鹿の家の防空壕の入口で、恐怖の眼で眺めたことがあつた。あの時の、あの花火のような火が焼きつくした跡を、今自分は歩いているのだと思つた。

米軍はB29でやつてきて、爆弾で、まづ木造家をこわし、次に焼夷弾で焼きつくすという作戦で、四日市と津を攻撃したが、標的が、むこの市民だつたことに、戦争とはいふものの、今も怒りを覚える。

さて、僕と姉は大門近くに来て、バラックの建ち並ぶ中の呉服屋を探した。しばらくして、めざす店を見つけた。何せバラックで、窓がないためか、中はうす暗く、昼でも裸電球がついていた。

そのうす暗い中で、姉は自分が持参した五分分の米で、銘仙といわれる、当時としては高価な織物の部類に入る反物を買った。今から見ると、それほどでもない布であるが、米五分分の価値ある物として、販売されていたのである。

帰りの途中、津新地駅のそばの店で、姉は僕に駄菓子を買ってくれて、

「よしみ、米を取られたことは、お父さんや、お母さんに言うたらあかん。あの米で買ったのは、この反物だけやった、ということにしておくでな。言うてみて、しかられるだけやしな。どうして、はたにおらんだんやつて姉ちゃんが、お母さんにしかられるでな。きつと、お母さんは、お前をしからんと、米を持たせて、離れていた姉ちゃんをしかる筈や。お母さんは、そういう人なんや。それで、黙り質に、飴を買ってやったんやからな」と言った。

母親の悪口は言うものではないが、僕の母は、たしかに男女差別を兄弟間で、平気でしていた。男尊女卑の明治の社会に成長した人だったから、むりもなかったと思うけれど極端に女にはきつく当り、男の僕には大変甘く、失敗しても、「子供もやで、仕方ないわ」と、言っつて、あまり叱ることもなかった。それがかえつて僕にはつらく思えたことも、たびたびあった。姉にはきついのに、僕には甘い、何だか、姉に悪いような、すまないよう

な複雑な気持ちになったりした。

母は姉に関して、

「よし子はやせていて、『藪蚊の足跡』などと、隣の兵造さんには言われるし、やせて、体格は悪いし、学校の成績も悪いし、器量と気前だけが、まあまあという程度や、それに洒落やし、農作業でも半人前で、百姓の手助けにもならんし、困ったものや」とよく言っていたものである。しかし、僕の見るところ、姉が馬鹿である筈がなかった。成績もきつと上位の方であつたろうと思う。

近所に住む姉の同級生の男の人は、「君の姉さんは、おとなしいが、芯はしつかりしていて、勉強もよく出来たぞ」と、言ってくれた。これは同級生の証言だけに、確かなことだと思う。

何といつても姉は姉であり、言うことも、することも、すべて僕の家では先生であつたし、ケンカをしてもかなわなかつた。女といつても年上だけに力も強く、僕がほうきをふり上げて、かかつていても、かんとんに、ほうきを取り上げられて、柔道の払い腰のようなワザで、いつも投げられていた。

しかし、算数のかけ算などで、困っていたりすると、親身になって教えてくれた。母がけなす程、悪い成績である筈がなかった。

第一、性格が素直で、まっすぐで、僕のことを何かにつけて、心配もし、喜んでくれたからである。しかし、母の眼から見ると、女というだけで、すべては半値だという判断を下していたようである。

僕らが小学生の頃、学年末に成績優良賞なるものを、クラスで二人ほどもらったものである。僕は、自分がその賞ももらえるかどうかは分らなかつたが、終業式の時、講堂で、校長先生から賞状を渡されて、うれしかったことを覚えてる。今はなぜか、こうした賞が、差別にながるということで廃止されているのは残念である。

人の世の原則は、山本五十六元師のこゝとばかりで、「やつてみせて、やらせてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」ということだと思つた。

勉強ではほめることが大切である。これは昔も今も、変る筈のない原則だと思う。何事でも、がんばった者には、それ

なりの報酬が与えられて当然の筈である。

さて、賞状を持つて家に帰ると、まっ先に姉が見て、

「よしみは、勉強よう出来るのやなあ。よかつたなあ。お母さんが喜ぶわ。通信簿も全部優やしな。これは姉ちゃんより、よく出来るわ。姉ちゃんは、この賞状がもらえんだでな。いつも、もらう人を羨ましく思ったものや。それを、お前がもらつてくれて、こんなうれいことはないなあ」などと言つて、大変喜んでくれた。こんな一枚の紙が、こんなに姉を喜ばせる力があるものとは、思わなかつたが、父がさつそく、額に入れて、座敷の鴨居の上に掛けたところをみると、値打のあるもののように思えた。父も、「これだけは、ぜに金で買えるものでないでな」などと言つていた。

その姉も昭和二十二年、米をとられた翌年の春、前に述べたように、縁あつて、近くの町の人のところへ嫁入りをした。

相手の、だんなとなる人は、県庁に勤める公務員で、姉より六歳年上の温和人だった。

仲人さんとの打ち合せも終り、婚姻の

日が決まると、「これで今年は、田植をせんでもええわ」と、姉はつぶやいていた。

結婚式後の宴が、田舎式のヤートコセーで祝われて、終ると、姉は仏壇の前で、両親に別れの挨拶をし、家の前の、両側に敷かれたワラが燃えている火の中の道を、仲人に手を引かれて、出て行つた。

ワラを燃やすのは、苦難に耐えて行け、という、この地方の昔からの風習である。

姉が去つていく後姿が淋しそうに感じられ何故か、無性に、淋しかったことを覚えていた。当時の僕は、淋しさを表すことばも知らず、ただ、じつと姉の後姿を見つめていただけだった。

姉は、津で米との交換で買った反物で仕立てた着物の上に、白い打掛を着ていた。今からみると、姉の着物は大変質素なものだったが、それでも一生に一度の晴れ着であつた。

それから五十年近くたった今年、僕の末娘が成人式を迎え、レンタルで振り袖の和服を着た。かなりの額をかけただけあつて、立派だった。馬子にも衣装というが、着物が立派だと見慣れている筈の

娘が美しく見えた。

娘と並んで写真をとる時、姉はこの着物を着た末娘との写真を、どういふ思いで眺めるだろうか、ふと考えたことであつた。